

と、杉浦の冷嘲を含んだやうな言葉が、受話器の向うで響いた。

「あゝさうか。それはお氣の毒さまだがね、奥さんは今日は頭が痛いとかで、まだ家におゐでるよ。今日はいらつじやらないだらう。」

「さうかい。ちやア冬子さんたちもゐるんだね。僕はまた、今日はこゝでお目にかゝるつもりで、今迄待つてゐただけだれどねえ。餘り遅いんで電話をかけて見たんだ。さうかい。……ふうむ。そいつは残念だな。」

小野はさうはいつたが、心の中では、何だかくわつと恨めしい思ひが込み上げて来るのを、どうにも禁することができなかつた。

「さうか。そいつはお氣の毒さま。」毎もの癖で、冷かすやうに杉浦は猶もいつた。「だが、一緒に活動を見ようなんて、さう甘くはゆかないさ。まア偶には、一人でぼんやり見物するのもいゝだらう。」それは杉浦の、毎もの毒口には違ひなかつたが、場合が場合だけに、小野にはカンと悪意を帯びて響いた。小野は殆ど杉浦に對して、憤怒に近い氣持を覺えざるを得なかつた。が、彼は聲を沈めていつた。

「兎に角、それちやア奥さんに、僕が兄貴と一緒に、お待ちしてゐたと傳へてくれ。」

さういつて、がちやりと彼は電話を切つた。そして何かを叩きつけたいやうな憤怒と、泣きたい程な怨恨とを抱いて、額を白ませながら、再び席へ歸つて來た。

「どうだつた。」

兄もさすがに待ち兼ねてゐて、さう訊ねた。

「いま電話をかけてみたら、奥さんが何だか頭が痛いとかで、今日は來られないといふんだ。……残念だけれど。……」

小野は申譯のやうに、何となく兄に恥かしいやうな、腋の下に冷汗する思ひで、さう答へた。

「さうか。」兄はすぐ小野の、顔色を幾らか見て取つたらしかつた。「そんなら、またお目にかゝる機会もあるだらう。いゝさ。今日は却つて來ない方が。——僕もさうこんな所で、お目にかゝりたくもなかつたんだから。……」

と、兄はそんなことをいつた。が、さういはれゝばいはれる程、小野は返す言葉もなく、助かない氣持に陥つて行つた。

彼はその夜、殆ど活動寫眞などは見てゐなかつた。彼の眼はたゞ白い眼前の幕に、ちかく動く映像を無意味に眺めてゐるだけで、夫人や冬子嬢に對する怨恨や、杉浦に對する憤慨や、兄に對す

る恥辱やで、胸が一ぱいだつた。就中杉浦の、悪意ある——と小野は思はざるを得なかつた——冷嘲に對しては、一時は胸も煮える程怨みと憤りを抱いた。……

……と、翌日、小野の語氣が、電話を通じて夫人たちに傳はつたものか、冬子嬢から小野に宛て、一通の詫手紙が届いて來た。

それはその前夜、帝劇へ來なかつた晩に、彼女が認めたものらしく、かう記されてあつた。  
「小野さん。

昨日は失禮しました。毎もと違つて、あんまり早くお歸りになつたので、なんだか淋しいやうな、詰らないやうな氣がいたしました。

今夜小野さんは帝劇にお出になつたんでございますつてネ。お一人でございますの。御兄さまも御一緒でゐらつしやいますの。

私お約束しておきながら參らないなんて、本當に御免遊ばせ。秀子さんも定子さんも、そんなに行きたくなさうでしたし、それにお母様が少し頭がおいたくて寝ておゐでになつたものでございませうから、私一人で行くわけにも參りませんでしたので、大變失禮なことをいたしました。どうぞよく御許し下さいませ。

けれど本當にあなたにお氣の毒でお氣の毒でたまりません。ですからいらつしやる前に、もう一度お電話をお掛け下さるやうに願ひいたしましたのに。

でも又今度御一緒に參ればよろしうございますわネ。——まだくこれから行く間は澤山ございませうもの。……

この間きました齋木善作といふ人の手紙また參りました。が、やつぱり私ではなくて定子さんの間違ひでございました。それだので杉浦さんが、又からかつて「先の手紙で姉の冬子が、大變喜んでをりますから、どうか姉の方で我慢なさつてくださるやうに。」つていつてやるつて、大笑ひをいたしました。

お手紙を上げないくと申しましたが、悪いことをいたしましたから、お詫までにさし上げます。字が下手でさぞお読みにくいでございますが、どうぞ我慢遊ばして下さいませ。

九月××日夜

冬子より。

小野辰夫様 みもとに。」

この手紙は小野にとつては意外だつた。そして繰返し／＼讀んで、少し媚びられてゐるやうにも感じたが、「まだ是から行く間は澤山でございますもの。」なぞといふ文言には、自ら嬉しい微笑を禁じ得

なかつた。併し、かうして小野の心は、この手紙に依つて辛うじて慰められたが、まだ心は平かになかつた。そして却つてこの手紙で、油を注がれたやうな心持で、一應彼は冬子嬢に對して、その時の恨みを述べずにはゐられなかつた。彼はすぐに手紙を書いた。

それには、彼女からの詫手紙を貰つて、今ではもう何とも思つてはゐないが、一時大いに夫人や冬子嬢を恨んだこと。そして同行の兄に對しても、何となく面目を失つたこと。さういふことを先づ書いて、胸の中なる思ひを、晴らすにはをられなかつた。

それに次いで、彼はその時杉浦が、電話口でとつた態度に對して、更に憤慨を述べずにはゐられなかつた。あの際彼のいつた冷笑的な言葉は、假りにも友達の困惑した場合に、發せらるべきものでないのみか、冬子嬢と小野との間に風をいれて、喜ばうとするかの如き悪意をさへ感ずる、といふやうなことを小野は書いた。書いてゐる中に、杉浦に對する彼の憤慨は、平素漠然と持つてゐた嫉妬、——彼女が杉浦に親しくする傾向のあることまで、言及せずにはゐられなかつた。彼は人形のこととも書いた。而して最後に、さういふ嫉妬を杉浦に感ずる位、自分の愛は切なるものだと言つた。それを書いて了ふと、彼は胸中の思ひをすつかり打開けたやうに、心が軽くなるのを感じた。そして早速それを投函した。

どんな反響が冬子嬢からあるか。と、それを恐ろしいやうな、楽しいやうな期待を以て、彼は一兩日を過ごした。

と、突然今度は碧子夫人からの來狀に接した。

「その後お目にかゝつたら、お話ししようと思つてゐたのですが、手紙で申し上げます。この間の帝劇の事ですが、あの時はいろいろ用事やら、お客やら、頭の痛いやら、又子供の都合もまともならず、お約束を違へて失禮いたしました。然し小野さん、貴方にも落度はありますよ。私は小野さんお一人のことです（それはお兄さんをお連れになるといふことは聞いてゐましたが）冬子への手紙へ書いておよこしになつたやうな、わざ／＼私たちに會はせたいといふお考へとは少しも氣が付きませんでしたから、子供は都合が悪いのいゝのと、愚圖々々いふし、それに自分の氣分も悪しするから、お約束だといつても他の人ではなし、貴方と私のことですから、失禮だけれどやめにしたので。それでも何だか氣が濟まないから、冬子によく手紙で譯を話して上げるやうにいひつけて置いたのです。その御返事を見て驚きました。さういふお積りなら何故そのやうに、確と私に仰有らないのです。さういふ事情でお目にかゝる約束をしたのなら、子供など連れずとも私一人で参ります。又私が行けなければ、冬子だけでもやります。貴方の方では私たちが來るものと思つて、お兄さんに

は私に逢はせるやうにお話しになつたのでせう。かういふことは外のことと違ひ、曖昧の話では事が間違ひますよ。第一私がお兄さんに對して、人を馬鹿にした失禮なものになり、貴方も信用がなくなる譯ではありませんか。尤もこの間上野の歸りに、兄さんに逢つて呉れないかとお話もありましたが、確かな御返事はいたさなかつた積りです。兎に角、貴方にも理窟はあるでせうけれど、そのことに就いては落度もありますよ。

久米正雄

小野辰夫様

啓

子

その手紙は、申譯のためのものであつたが、併しその文面の裏には、夫人が少し小野に對して、立腹してゐるらしい様子が、それとなく現はれてゐた。——反響は、幾分豫期しなかりはなかつたが、小野にとつて意外に不安な方面から來た。それでなくても夫人からは、殆ど理由も分らずに、少しく機嫌を損じてゐる際だつたので、彼には殊更不安だつた。

で、その翌日、小野は申譯旁、勝見家へ遊びに行つた。もうあんなことに關しては、何とも思つてゐないから、冬子嬢を通じて、恨みを述べたりしたことは、許して呉れといはうと思つて、訪れたのだつた。

三月二日

と、夫人は留守だつた。その日の午前中に、頭の具合が悪いからといつて、その療治旁鹽原へ紅葉見に行つたとの話だつた。留守には冬子嬢も杉浦も残つてゐた。

杉浦は小野に會ふと、二人になるのを待つて、こんなことをいひ出した。

「君の冬子さんに宛てた手紙を見たよ。そして不快だつた。」

「さうか。けれどもあの時は僕は、君に對して全く正直のところ、あゝ感じたもんだから、率直に書いて了つたんだ。君の口吻が餘り癢に障つたんでね。だが、もうあんなに思つてゐる譯ではない、君の本心さへ解りさへすれば、あんなことは全く一時の感情だ。あれにも書いて置いた通り、冬子さんに對する情熱の餘り、あんなことをいつて了つたんだ。それで君を不快にしたとすれやア、僕が悪かつた。詫るよ。」

「併し、兎も角。」と、杉浦はその頃短く刈つた坊主頭を、厭にちやんと伸ばし立てゝいつた。「僕はあれを読んでから、君たちに對する態度を決定したよ。僕はこれ迄及ばずながら、君たちの味方になつていろ／＼と同情して來た積りだ。が、これからは、もう絶対に無關心でゐようと。——敵にもならないし、その代り味方にもならない。それだけははつきりいつて置くよ。」

さう宣言されては、小野もどうにも仕方がなかつた。殊に、この頃の地位のいゝのを利用して、

厭に高壓的に出られては、少しの反感もむら／＼と起きて、かういひ返さずにはゐられなかつた。「さうか。君があれだけのことで、さう思ふのなら仕方がない。いづれ僕のあの時の氣持が、君にも分る時がくるだらうから、これ以上の辯解はしないよ。」

「兎に角僕は、君たちに對する態度が、さし當りさう定つたことだけいつて置けばそれでいゝんだ。たゞそれだけの話なんだ。」

反響は益々意外な方向へ、擴がつて行くのを小野は感じた。そして不安にも思つたが、仕方がないとも思つてゐた。

一週間ばかりして、夫人も鹽原から歸つて來たが、小野が軽くいろ／＼な申譯をしたのに對して、言葉少なに答へたきり、どうしても機嫌は直らなかつた。

## 三

さうした形勢の中にあつて、小野はまた一と波瀾を起すやうな事件を、ふと起して了つた。といふのは、前に冬子嬢からの手紙に、書いてあつた齋木善作といふ男と、冬子嬢——といふより事實

は冬子嬢——に關する出來事を骨子にして、彼が「一挿話」といふ小説を作り、それを雑誌「新聲」に發表したことだつた。

その齋木善作といふのは、冬子嬢が勝見家から目白までの、通學筋に當るある町の、藥屋の主人だつた。そして毎日店の前を通る、冬子嬢の姿を見て、それに憧憬を感じたと見え、遂にそれが勝見家の令嬢だと解ると、ある日わざ／＼手紙を以て、結婚を申入れたのだつた。

その手紙が、勝見家に届いたのは、小野も杉浦も座にゐて、いろ／＼談笑してゐるときだつた。「お母様、今どこからだかこんな手紙が來てよ。」

冬子嬢がそれをもつて來た。夫人がそれを受取つて見ると、四角い粗末な洋式封筒の表には、勝見新太郎様と常主の名が記してあつた。そしてその裏には何の署名もしてなかつた。夫人は何氣なしに封を切つた。すると中からは一枚の名刺と、半紙一枚へ亂暴に字を走らせた書狀が出てきた。夫人はすぐそれを押し開いて、ずつと文面に目を通したが、それから怪訝な顔に微笑を浮べて、かう皆の前へ手紙を擴げて見せた。

「鳥渡、これは何でせう。こんなことをいつて來たのよ。」

皆は異常な興味を以て、その文面を覗き込んだ。手紙にはかうあつた。

二〇五  
夏目漱石の書翰集  
一〇九  
一〇九

△「拜啓。甚だ率直なる申分ながら、貴家御令嬢冬子様儀、他に御差支等無之候はゞ、小生に御遣し下され度、小生の財産身分等は、何時にても調査に應ずべく候。右突然ながら手紙を以て願上候敬具。」

さうして名刺の方には、「神人合一論者。牛込區早稻田鶴巻町××番地、正顯閣、齋木善作」としてあつた。

皆は一度その亂暴な字體を推讀して、大體の意味を捕捉すると共に、顔を見合せて噴出して了つた。さうして改めて封筒の裏表や、名刺の活字などを注意して見た。が、それらは單に誰かゞ悪戯の爲にそんなことをしたとは、どうしても思へない眞實さが現れてゐた。

「妙なことをいつてくる人があるものね、一體正氣なんでせうか。」  
夫人は暫くしてかういつた。

「ちやんと番地入の名刺まで入れてきてゐるのを見ると、満更唯の悪戯とも見えませんね。」  
杉浦がいつた。

「一體こんなことで、すぐ娘一人をやる氣になると思つてゐるんでせうか。正氣にしても少し可笑しうわね。」

「だから、調査に應ずるから、いつでも調べに来てくれといふんでせう。案外大した金持の息子が何かゝも分りませんよ。」

「それにしても全く『率直』だね。率直過ぎるね。」

小野も笑ひながら、口を挟まずにはゐられなかつた。

「どうです奥さん。差支がなかつたら、一つ冬子さんをお遣しになつちやア。」

杉浦はまた例に依つて、得意の揶揄を始めた。

「全く冬子さんには、却つてその方が幸福かも知れませんよ。神人合一論者で、自ら財産や身分の調査に應じうる位自信があるんだから、僕たちのやうな輕薄才子とは、自ら選を異にしてゐるかも知れませんかからね。」

小野も皮肉を籠めて、そんな冗談をいつた。

「さうね。」夫人もそれに應じた。「この人でも確かに貴方がたよりは上等らしいわね。」

「どうです冬子さん。」杉浦は猶も、揶揄の鋒先を轉じて續けた。「お差支がないことゝして、一つ齋木夫人におんななさい。マダム・サイキ。語呂からいつても、なか／＼ちやありませんか。」

「知らないわ。」冬子嬢も苦笑してゐたが、揶揄を受けると眞顔になつていつた。「他人のことだと思

つて。——悪戯でも何でも、氣味が悪いぢやないの。ねえ母様。どんなことされるか分らないから、すぐ何とか斷りの返事を出して頂戴よ。」

「なに、放つてお置きよ。こんな手紙へ正直な返事をやる必要があるものかね。馬鹿々々しい。」

「全くさうですね。相手にしない方がいゝですね。」

そんなことで、最初の手紙は、笑ひ話の中に葬られて了つた。が、それからまた四五日過ぎると、第二本目の督促状が來た。それにはまた矢張り半紙一ぱいに、この間は手紙を差上げた筈だけれど、未だに返事のないのはどうした譯だとか、餘り率直だつたのでお怒りかも知れないが、どうか自分の衷情を察して、是非乞を容れてくれとか、さうしたことが再び記されてあつた。そして今度は細々と、自分の身分がその中に述べられてあつた。

それに依ると、齋木なる男は、新潟縣の生れで、年は三十四歳であり、家にはちやんとした妻子があるが、その妻にはちやんといひ聞かせてあるので、冬子嬢さへ來てくれると定れば、いつでも別れることになつてゐるといふのだつた。そして自分は、今でこそ片手間に藥劑師をしてゐるけれど、やがてはそれをやめて了つて、自分の本領たる神人合一論といふ一種の宗教を樹立し、いまの混沌たる思想界の迷夢から、人類を濟ふのが目的だ。そしてそれにはいまの妻ではいけない。もつ

と立派な教養のある冬子嬢のやうな人を、内助者として必要だ。その冬子嬢とは毎日通學の毎に、顔を見るので知つてゐるが、いかにも自分の理想の妻たるに相應しい。——

さういふことが、半紙數枚に亘つて、亂暴な大きな文字で、しかも神來を以てしたやうな自由奔放な行文を用ひ、俗語を引用したり、格言を挾んだり、また行と行との間へ割註を入れたりして、實に奇妙な手紙を形作つてゐた。そしてその行と行との間へ、更に細かく書き入れをするのは、物に熱して精神が昂揚した際、自分のよくする癖であつて、誠に讀み悪いかも知れぬが、自分の平生を知つてゐる人には、却つて直接の精神的接觸を感じさせるのだから、その積りで讀んで欲しいとまで書いてあつた。

それを讀んで、勝見家の人々は呆れた。と同時に、その最後の文句に依つて、彼が現に通學中の定子嬢と家にゐる冬子嬢とを、取り違へてゐるのを知つた。その妙な男に、見初められたのは定子嬢だつた。定子嬢と冬子嬢とはさう歳も違はず、また身體の大きさも殆ど變りない位だつた。それで齋木某が、定子嬢のことを勝見家の令嬢と聞くと、一も二もなく長女の冬子嬢だと思つて、そんな求婚狀を寄越したに違ひなかつた。一體に定子嬢は、目鼻立の派手な、ぱつと目に立つ美人だつた。それで彼女はよく、早稻田の學生や何か後につけられたり、また手紙をつけられたりした。

中には大膽に電話で呼出したりした者さへあつた。だから齋木某なるものが、さうした考を起したのも、定子嬢なら無理もないと思はれた。どちらかといへば目立たぬ、大人しい冬子嬢が、そんな見知らぬ男から求婚を受けるといふことは、初めから可怪しかつた。——そのことが、冬子嬢から小野に宛てた手紙に、書き記されてゐたのだつた。

しかし兎に角勝負家にとつては、定子嬢にもせよ冬子嬢にもせよ、そんなことをいつて来る男があつては、不安を感じざるを得なかつた。狂人だからとばかりに相手にしないでおくと、いつどんなことをされるか解らない懸念もあつた。それで、一つ警察へでも頼んで、巡査に説諭でもして貰ふか、警戒して貰ふより外はないといふことになつた。けれどもまた、事が事だけに、内分で済むなら済ましたかつた。それで夫人と杉浦と小野とが、いろいろ相談の結果、兎も角もあゝして、齋木某の方では身分の調査にも應じるといつてゐるんだから、一應向うへ訪ねて行つて本人にも會つた上、よく此方の事情を話し、きつぱりそんなことはしないでくれと斷つた上、それでも背きさうもなかつたら、そのときこそ警察の力を藉りるなり何なりして、處置をつけた方がいゝといふことになつた。

そしてその談判には、小野と杉浦とが、一緒に行くことになつた。

秋のある晴れた日の午後、彼等は殆ど面白半分に、鶴巻町といふから散歩がてら、その正顯閣を訪れるために出かけた。

途中、小野は何となく不安な心の中で、いろいろな場合を想像した。彼はまづその男を、場所柄早稲田大學を中途でよした位の、毛色の變つた哲學者か何かのやうに想像した。そしてそれが實は隠れたる天才であつて、顔なども病的な畸形美を備へ、炯々たる眼光を放つ男で、行つて見ると彼の書架には、東西古今の哲學書が満ちてをり、その中で彼は致々として神人合一論の著述に没頭してゐる。……そんな風に想像さへした。そしてその想像は馬鹿げてゐるが、いづれにもせよ齋木といふ人は、きつと説服し難い奇人には違ひないと思はざるを得なかつた。

小野と杉浦とは鶴巻町の通りへ出ると、その車夫溜で番地の所在を尋ねた。

「××番地の正顯閣と。……聞いたことがあるやうですが、鳥渡思ひ出せませんな。けれども××番地ならこゝから二丁ほど行つた、少し大きな横町から先ですから、その邊へいつて訊いて御覽なれよ。」

車夫はかういつて教へてくれた。

小野は何だか敵地に臨んだときのやうな、一種の不安を心臓のあたりに覺えた。そして正顯閣な



るものゝ存在が遂に不明で、齋木なんて男はゐないでくれよばいと、ふと思つたりした。が、杉浦は先に立つて、どん／＼その方向へ歩いて行つた。

車夫のいつたやうに、二丁ばかり行くと、成程左側にそれらしい横町があつた。

「こゝだらう。」

小野はかういつて立止つた、

「うむ、こゝらだらう。」

杉浦も繰返した。そして二人は、改めて四邊を見廻した。と、そのとき二人の眼は同時に、向う側の横町の角にある、小さい薬舗の中に吸ひつけられた。

「あれだらうか。」

杉浦は自ら聲を潜めていつた。

「あれかも知れない。そつと調べて見よう。」

小野も唾を呑むやうにして答へた。

そこで二人はさりげなくその前を通り過ぎて、薬舗の名を調べることにした。二人はできるだけゆつくり歩いて、その看板を横目に睨んだ。すると黒い中に金で抜いた中將湯の看板や、屋上に

掲げた亜鉛張りの店名に、正しく正顯閣、齋木薬舗の數字を認めた。杉浦は小さな聲で、「此處だ。」といつた。小野はそつと點頭うなづいた。

よく見ると店頭には、もう四十を越したかと思える、頭の禿げかゝつた一人の男が、無精髯に顔の半を埋めて、勘定臺に肘を凭せたまゝ、ぼんやり何か考へながら、坐つてゐるのが見えた。

二人は少し行き過ぎて立止つた。

「あれだらうか。」

杉浦は、もうくつ／＼と笑ひながら、しかしまた聲を潜めていつた。

「あれだらうかね。」

小野も、あれがさうだとすれば、その餘りな意外な男なのに、疑ひを抱かざるを得なかつた。

「けれども確かに看板にも、齋木といふ名は出てゐるし、あの軒の名札にも、確かに齋木善作と書いてあつたからね。あれだとすると滑稽だね。彼奴が店先にあゝしてゐて、定子さんを見初めたんだとすると、實に可笑しいね。」

「さうだね。あれだとすると、僕はもう今更談判する勇氣も挫けて了つたよ。けれど、ひよつとすると善作といふ男は、あの二階を借りてゐる別な人かも知れないから、まア兎に角入つて行つて、

話だけはつけて来よう。」

二人は一種の勇氣を振り起して、その店頭へ敢然と入つて行つた。小野はさすがに氣後れがしたが、杉浦は遠慮なく真直にそこへ立塞がつた。物思ひに沈んでゐたらしい店の主人は、二人の足音に情けな顔をぢつと上げた。彼は二人を普通の客と思つたらしかつた。

「私たちは勝見家から参つたものですが、齋木善作さんと仰有るのは貴方ですか。」  
杉浦は會釋もなくはつきりいつた。

男の顔には一瞬間、非常な狼狽が見えた。そして悪い顔色が一層蒼ざめた。それから疑懼するやうな、哀願するやうな眼付を、ちらと二人に走らせて、上づつた聲でかういつた。

「あ、さうですか。私が齋木です。ではどうぞ二階へお上りください。」

小野と杉浦は、顔を見合せて點頭き合つた。それから下駄を脱いで上つた。そして彼の導くまゝに、店先から梯子段のある茶の間を通つた時、二人はそこに何か縫物をしてゐる、二十三四の細君らしい若い女を認めた。打見たところ、それは可愛らしい家婦であつた。二人はその齋木君が、多子嬢さへ来てくれれば、いつでも別れるといふ細君らしい女を見て、互に微笑を以て點頭き合つた。

二人はぎし／＼いふ梯子段を踏んで、兎も角も二階へ上つた。新開地らしい粗末な建て方である

1.50  
10.50  
1.30

が、新らしいので割に綺麗だつた。窓の外の突出し縁には、二三鉢の草花などが置かれてあつた。主人は二人を導き上げておいて、また急いで下へおりた。小野はひよつとすると彼が、何か兇器でも取りにおりたのではないかとさへ思つたが、あの人の好きさうな四十男に、迎もそんなことのできる譯はないと思ひ返して、室の中を眺め廻してゐた。主人はやがて下から、客用のらしい座布団を持つて上つて来た。二人は改めてその上に坐り直した。

と、杉浦がまづ嚴然とした口調で口を切つた。

「では早速ながら用件を申し上げます。私たちは實は、度々貴方から勝見家の方へ手紙を頂きましたので、その御返事旁参つたものですが、貴方の仰有る勝見家のお嬢さんは、もう外に定つたところがございまして、折角ですが御求婚には應じ兼ねますから、以後決してあんなお手紙などはくださらぬやうに、呉々も申傳へて来てくれといはれて参りました。」

「はい、それは、……」

主人は自ら下を向いて、何かいひかけようとしたが、杉浦は猶も押つ蔽せるやうに、更に嚴然といひ續けた。

「で、貴方が細君を御離別なさらうと、なさるまいとは御勝手ですが、勝見家の方ではあんなこと

をいつて来られると、甚だ迷惑しますから、どうか勝見家の令嬢に對しては、決して何もなさらぬやうにして頂きたい。それだけのことをお話に参りました。」

かう杉浦はいつて了ふと、見下すやうに肩を反らした。

「はい。よく解りました。」主人は豫想外に早く聽從して、大人しく、吃りながらいつた。「貴方がたが行らしてくだすつたので、もうすぐ何も仰有らなくとも、私の方では思ひ切りました。」と、更に口調を改めて訴へるやうに、「かういふことは、どなたにもあることでして、貴方がたも少しは察して下さいませうが、私もいろ／＼考へましてな。どうも今の妻が性に合はぬものですから、是非御令嬢をお貰ひしたいと思つたんですが、お二方がわざ／＼おいで下すつたんで、もうよく解りました。只どうかよく仰有つて下さい。私のやりましたことは、私としてはよく考へた後にやりましたので、世の中の不良少年のやり方とは、結果に於いて同じでも、考へは違ふのでございますから、どうか是からもその點だけは、決して御心配なさらんやうに。——」

「さうですか。さう申しませう。」

杉浦は眉根一つ動かさずに、冷然と答へた。彼はさうした場合、いつも手強い態度を持してをられる性分だつた。小野は何となく氣の毒なやうな、妙な同情を以て黙つてゐる外なかつた。

主人は續けていつた。

「妻のことも、あゝ申し上げましたが、まだ歸さずに置きましたから、御心配下さらないうやうに、——あの、只今下にをりましたのが、あれが妻です。妻も決して悪い女ではないのですが、どうも私と性格が合ひませんので、私は今でこそ藥局などをしてをりますが、是からは思想方面の著述をしようと思つてゐるものですから、妻によつて性格の傷つけられるのを何より恐れましてな。自分の進む道の爲には、どうしても今の妻と別れて、新しい生活をしなければならんと思つたのです。」

「はあ。それは御勝手ですが、思想上の著述とやらが、さう今迄の生活を犠牲にする程、價值のあるものでせうかな。」

杉浦は猶も冷然として、そんな手強い皮肉をいつてゐた。

「只今、私の著述の一斑を、御参考までにお目にかけてませう。さうすれば私の意のあるところも、幾らかお分りになりませうから。」

と、齋木氏はかういひながら、傍の押入れの中から一つの支那靴を取出した。そしてその雜然と反古めいたものゝ入つた底から、一綴りの原稿を引出した。

打見たところ、それは三百枚もあらうかと思はれる、半紙に大きく墨で書いた、——あの手紙と

同じやうな、——老大なものだった。彼はそれを輕蔑と妙な興味とで、黙つて眺めてゐる二人の前で、二三十枚ざつと繰つて見せた。そしてところ／＼の要點を大聲で讀んで聞かせた。それは理路の立つてゐないといふ程ではなかつたが、ひどく國士的な漢文口調の論文だった。

「……まア是が、私の著述なんです。此の清書した奴は、只今活版所に廻してあります。前に一部分を印刷したのもありました。皆それは私の知友やら、全國の圖書館、神道に關係した人々、思想上の先輩などに送つて了りましたので、こゝにさういふ人たちの受取りがございます。これがその大隈さん。それから是が犬養さん。これが杉浦重剛さん。まアざつとこんな具合ひでして、これらはいづれも始終私の交際してゐる人々なんです。——要するに私の論旨といたしますところは、人間の中に神格といふものを認めまして、それに依つて神壁——神の壁ですな。——神壁の中へ入れば、人間は即ち神と成りうるといふ議論でして、この書の中にも十分に論じ盡してはをりませんが、いづれは生涯の事業として完成する積りでをります。一體私がかういふことを始めました動機は、若い時に大變身體が弱うございました。北海道から樺太をかけて遊び廻つたことがございました。その時に漠然とかういふことを悟つたのですが、その後畏くも明治天皇の御尊格や、乃木將軍の御性格などをよく調べますにつれて、いよ／＼自分の考が間違つてゐないのを知りました

ので、先づ家にゐた書生やら妻などによく話して聞かせましたところが、さういふ貴い考なら、是非何かに書き残して置いたらいゝだらうといふので、妻などに勧められたのが抑もの動機でした。」

「さういふ結構な奥さんぢやありませんか、いはゞ貴方の御著述の産婆でせう。」

杉浦は又さういふやうなことを混ぜつ返した。

「それもさうですが、どうも性格が合ひませんでな。私は性格が傷つけられるのを何より恐れてゐるものですから。」

齋木氏はもう一度かういつた。彼は性格を傷つけられるといふ言葉が、非常に得意らしかつた。

「もうお暇しようぢやないか。」

小野はもう馬鹿／＼しいやら、何だか氣の毒なやうな氣持やらで、杉浦を促した。

「歸らう。」

杉浦も應じた。

「さうですか、どうもわざ／＼おいで下すつて恐縮でした。ではどうぞお歸りになつたら、勝見さんの方にも宜しく申上げて下さい。決して御心配なさらぬやうに。以後は決して何も申上げませんから。或ひは年始状ぐらゐ差上げるかも知れませんが……」

小野はその言葉に、思はず微笑んだ。が、杉浦は、「承知しました。」

と、相變らず端然と答へた。

すると齋木氏は聲を低めて更にいひ出した。

「それから階下にをります妻には、貴方がたを普通の知人だと申して置きましたから、何分さうお含み置きを……」

「え、承知しました。」

小野は杉浦と顔を見合せながら、快活にさう答へて立上がった。

歸る時も細君は、何も知らない愛想笑ひをしながら、二人を送つて出た。小野はその細君に對して、妙に氣の毒なやうな、滑稽なやうな感じがして、正視するに堪へなかつた。

二人は普通の客のやうに、普通に挨拶して戸外へ出た。そして暫く道を行つて、もう齋木藥舗から聞えない位遠ざかると、それまで堪へてゐた變に悲喜劇な感じから、思はずぶつと噴出してしまつた。

二人はもう誰に憚ることもなく、街中で聲を立てゝ笑つた。……

その事件を小野は、雑誌「新聲」記者から寄稿を頼まれた時、他に適當な材料が無かつたのと、少しはその時分の自分の心持を述べたい氣持のために、さう深い考もなく、筆にしたのだつた。そしてその女主人公を、事實は定子嬢の間違ひだつたに係らず、どこまでも冬子嬢自身のことにして、しかもその主人公なる「私」といふ男を、その令嬢の許婚として描いた。その許婚なる「私」が、その不思議なる求婚者に對して、抱く感想を描いたのだつた。

そのことが、意外にも非常に大きな波瀾を、小野と勝見家との間に起してしまつた。

#### 四

その小説が「新聲」に發表されると、その翌日のことだつた。小野は突然勝見夫人から、一通の速達便を受取つた。急いで封を切つて見ると、それには、たゞ簡單にかう書いてあつた。

「少しお話したいことがありますから、明日午後三時頃そちらへお訪ねします。どうかよそへ行かずに待つてゐて下さい。」

それを讀むと小野は、さすがに不安な胸騒ぎを、その厭に簡単な文言から、どきりとする程激しく受けた。彼はあの小説を書いたものゝ、さすがに勝見家で起つたことを材料としたことだけに、幾らか氣が咎めてゐた。別に勝見家の人たちに、迷惑をかけるやうな悪いことは、少しも書いた積りはなかつたが、それでも一家の私事を材料としたことには、何となく濟まないやうな氣がしないではなかつたのだ。

そこへ夫人からその手紙だつたので、彼は「あ、矢つ張りさうだつたか。」と、大體の事態はすぐに推察した。夫人は怒りに來るに違ひなかつた。——向うから、わざ／＼出向いてくるといふからには、よほど怒つて、何かいひに來るのだ。——さう思ふと彼は、何だかゝるでも立つてもゐられないやうな、不安な思ひに閉されざるを得なかつた。どんな風に夫人は怒つてゐるだらう。怒つて、どんなことをいふだらう。そしてその結果、自分と勝見家との關係は、どんな風になるだらう。……

併し小野も、さすがに少しは覺悟を決めた。自分のやつたことは、もうやつたことで仕方がない。自分は決して悪意でやつたのでも、また爲にしようと思つてやつたのでもない。だからそれが

夫人からどんな怒りを買はうと、それは仕方がないことだ。まア明日夫人が來て、どんな風なことになるか、それは成行に任せる外はない。……と。

が併し、さうは覺悟を決めても、不安は矢つ張り不安だつた。殊にその翌日、夫人の來る迄待つ間の不安と焦燥は、殆どちつとしてゐられない程だつた。

もう冬になりはじめの、薄い赤ちやけた日の光が、傾きかけて下宿の二階の縁にさしこんでゐた。そしてそれが妙に頼りない影を、障子の裾に映してゐた。三時といへば、もう暮れ早な街には、何となく物悲しい雑音が流れて、それが小野のちつと待つてゐる心を、更に不安と焦燥とに陥れた。彼は幾度か中腰になつて、狭い硝子の笹つた障子の腰から、今夫人が下宿の前の狭い路次を、はひつて來るか／＼と待つた。

たうとう夫人の黒い姿が、其處へゆつくり入つて來た時、小野はやつと吻とした思ひと、更に激しい心内の不安とに襲はれざるを得なかつた。

下宿の婆さんの「勝見さんの奥さんがいらつしやいました。」といふ案内を待つか待たずに、急いで梯子段をおりて行つて、

「どうぞ。……どうぞお入り下さう。」

といった小野の言葉は、妙に乾からびたやうな顔へを帯びてゐた。夫人は、例に依つてむつと黙つたまま、従容として二階へ通つた。

「わざわざよくいらしつて下さいました。汚い布圍ですがどうぞ此方へ。」

夫人は下の婆さんが、茶器を持つて来て勸め去るまで、殆ど口敷をきかずに、其處へどつしりと坐つてゐた。小野は又その無言の態度から、更に不安と畏怖とを興へられた。

婆さんがおりてしまふのを待つて、夫人はその結んだやうな口を切つた。

「小野さん、今日私がお話に來た用といふのはね。外でもありませんけれど、あの貴方が『新聲』に出した小説ね。あれは一體、何？」

夫人の言葉は、もう考へて來たかのやうに、初めから鋭かつた。

小野は矢つ張りさうだつたかと思ひながら、首を垂れてかう答へる外かなかつた。

「あゝ、あれですか。あれは別に何の氣もなしに、書いて出してつたんですが、何か悪いことでもあつたんですか。もしさうでしたら……」

夫人は皆までいはず、押つ蔽せるやうに聲を躰ましていつた。

「何か悪いことどころぢやありませんよ。貴方は一體あんなことを書いて、それでいゝと思つてゐるんですか。第一、貴方はまるで自家の冬子と、もう正式に婚約ができてるやうに書いて、それで差支ないと思つてゐるんですか。——貴方はきつとあゝ書いて、廣く世間に發表してしまへば、先輩たちも黙つてしまふし、自家でもまたどうでも貴方との結婚を、承知しなければならなくなると思つて、さう仕向けたんでせう。」

夫人にかう疊みかけて、激しくいひ出されると、小野は殆どおどくして、どういひ解いていゝか分らぬ程だつたが、さうまでいはれては、さすがに彼も、顔を上げて答へない譯にはゆかなかつた。

「いえ、決してそんなことはありません。そんな政策的な積りで、僕があれを書いたなんて、それは餘りといへば餘りな奥さんの誤解です。僕はたゞ、……それやア眠々の中に、さういふ氣持は働いてゐたかも知れませんが、書く時は只あゝした方が、主人公の境遇上工合がいゝから、思ひ切つてあゝ書いたに過ぎません。」

「いえ、それはさうかも知れませんが、私のやうに想像されても、併し仕方がないぢやありませんか。貴方は前にも、まだ正式に何も定りもしないのに、お兄さんと私たちを逢はせて、そして

何とかして因縁を付けようとなすつたぢやありませんか。——いゝえ、あの時の貴方の心持は、何とか理窟はありませうけれど、矢つ張りさういはれても仕方がありませんよ。」

「それやア、さう迄仰有るなら、僕は何とも申上げられません。たゞ自分としては、そんな深い下心が在つてやつたのではない積りですが、それがさういふ風に見做されて、お氣に障つたとしますと、僕はたゞ自分の考へが至らなかつたことを、お詫びするばかりです。」

小野は危ふく湧きかゝつた熱涙と、何ともいへぬ口惜しさを堪へて、さう頭を下げる外なかつた。

「それやア私だつて何も、貴方がそんなお考ばかりで、あんな小説をお書きになつたとは、思つてはをりませんよ。併し貴方があんなことをなすつて下すつちやア、他人からさういはれたつて、返す言葉もないぢやありませんか。何故貴方は一體、そんなことをなすつて下すつたんです。何故あんな小説を書いて、私たちのことを世間に發表して、迷惑をかけたりなさるんです。」

夫人も自分の言葉に感動して、自ら涙を含んだ聲を出した。さういはれては小野も、全く答ふる術がなかつた。

夫人は又聲を勵まして續けた。

「一體貴方は何故、私のいふ通りに、下らない小説なんぞ書くのを、おやめにならないんです。前から私が呉々もいつてるぢやありませんか。生活費位は何とかして補助して上げますから、今から下らない小説なんぞ、決して書かないやうになさいつて。それなのに貴方は肯かないで、たうとうあんなことまで書いてしまつて。——一體それからして貴方は間違つてゐるんです。」

「併し奥さん。」小野はやうやく顔を上げていつた。「僕は矢つ張り小説が書きたかつたのです。それやア奥さんが、生活を幾らか保證して下さるから、下らないものを書くなつていつて下すつた心持は、有難く思つてゐるんですけれど、僕は矢つ張り何だか書かないと淋しくて、書かすにはゐられなかつたんです。」

「そんなら書くにしても、何故もつと立派なものを書かないんです。あんな下らない小説を發表しちやア、第一私たちが先輩に對しても、顔向けができないぢやアありませんか。貴方が九月號に出したものなんか、何處でも評判が悪いぢやありませんか。米田さんなぞだつて、一言もあれに就いて批評さへしないぢやありませんか。」

さうまでいはれては、小野も更に黙つてはゐられなかつた。

「併し僕は、僕の今の力だけのものを、書いて發表してゐる積りです。そして今は奥さんのおつし



やる通り、下らないものばかり書いてをりますが、僕は書きながら自分を成長させてゆく積りです。米田さんの月評などは、寧ろ奥さんが念頭に置く方がをかしい位です。」

さう反噬されると、夫人は更に別な方面から、またかう小野を遣り込めずにはゐられないらしいかつた。

「それはさうかもしれません。が、書く物の方は別としても、この頃の貴方の爲さる色々なことは成つてゐないぢやありませんか。あの冬子にお寄越しになつた、皮肉交りの手紙は何です。また廻りにもお友達で、貴方に一番盡してゐる杉浦さんに對する、あの下らない嫉妬は何です。」

小野はそれには頭を垂れて、呟くやうにかういつた。

「併しあのときは、あゝいはずにはゐられなかつたのです。僕も餘りに輕率なことをしたと、今では悔いてゐます。」

夫人は猶もつけ加へた。

「ほんとに杉浦さんの人格に對して、恥かしいとお思ひなさい。」

「……………」

さう迄いはれても、そのとき小野には返す言葉もなかつた。

夫人は暫く沈黙した後、更にまた結論するやうにいつた。

「とに角、これもみんな貴方を思ふから、私はこんないひたくもないことをいふんですよ。だから貴方もよく氣を付けて、自分のしたことをお考へなさい。そして是からは人に後指さゝれないやうに立派な行動をしてください。貴方がまたあんな風なことばかりなされると、私たちは考へ直さなくちやなりませんからね。」

小野もその言葉に、幾らか坐り直すやうにして、何となく溢れくる熱涙を抑へながら、かういつた。

「解りました。以後は決してそんなことはいたしません。そして私のことに就いてはよく考へてみます。」

「ほんとにさうなすつてください。それから是非はくれぐれも申上げておきますがね。今日私は何も貴方と冬子とのお話を斷りに來たんぢやないんですよ。たゞ御忠告に上つたんですからね。ほんとによく、貴方が立派にさへなつてくださいれば、決して私たちの考は變らないんですからね。ようござんすか。」

夫人の眼にも、さすがに涙が光つてゐた。

「有難うございます。」

小野ももう頬に傳はる涙を感じながら、さういつて首を下げるほかはなかつた。やがて、夫人は歸つて行つた。小野はその後姿を見送つて了ふと、口惜しさと悲しさともつかぬ熱涙が、滂沱と頬を濡らし落つるのを、どうともすることができなかつた。夕闇はもう部屋の中に忍び込んでゐた。

## 五

それから三日間、小野は自分の部屋に閉籠つて、そして考へ續けた。考へれば考へる程、凡ての事態が絶望的に思はれた。夫人は最後に、あゝはいつてくれたものゝ、その態度といひ物いひといひ、凡ては小野にとつて、もう不利に陥つてゐることを、彼は胸に感ぜずにはゐられなかつた。夫人はあゝはいふものゝ、よく考へるといふのは、自分の方からはいひ出さず、悪いから、そつちで考へて處置しろと、さういつてゐるやうに思はれた。少くとも事既に此處に及んでは、どうしても小野の方から、進退伺を出さなくてはならぬのを、彼は思はずにはゐられなかつた。

彼は勝見家に對して、茲で自分の方から、進んで縁談を辭退するのが、本當のとるべき道かと思つた。が、併し、それは彼が冬子嬢に對して、まだそれだけ愛と未練がある限り、到底できないのを感じた。

けれども、この際少くとも向うに對して、此方から少くとも向うの選擇に任せることを、提議するだけではできると思つた。さうすれば、向うに少しでも眞の愛があるならば、この位の過失はほんの一時の問題として、すぐに許してくれるに違ひない、もしこの位のこと、到底許されないとすれば、そのときは此方から幾ら思つたとて、それは寧ろ詮ないことに違ひなかつた。

「さうだ。さうしよう。向うの考へに凡てを任せよう。かうなつてはさうするよりほか道はない。」さう小野は決心した。その上彼は、向うの心一つに任せるやう決心したのは、一縷の希望があつたからだつた。彼はまだその時分まで、飽くまで冬子嬢の心が、さう自分を離れてゐるとは思はなかつた。といふのは彼はその一週間ばかり前、彼女と離室はなれの方で會つたとき、彼は思ひ餘つてこんなことを訊ねたことがあつた。

「冬子さん。僕はこの頃奥さんの御機嫌を、大變損じてゐるんですがねえ。もしこんなことが度重なつて、僕が奥さんと喧嘩でもするやうになつた場合、貴女はどつちへついてくれますか。」

彼女はちつと考へ込んで答へなかつた。

三三〇

「そしたら僕についてくれますか。お母さんをすてゝも、僕について来てくれるだけの決心がおありですか。——僕は冗談でいつてるんぢやありませんよ。ほんとにそんな問題は、考へておかなかちやならないことだから、貴女に訊いてゐるんです。——僕について来てくださいますか。」

冬子嬢はそのとき、低い聲ではあつたが、かうはつきり答へた。

「それやアさうなれば、仕方がありませんわ。」

「僕の方へ来てくださるんですね。」

小野がかう念をおすと、彼女は確かに點頭いたのだつた。

それが一週間ほど前のことだつた。だから小野は事態が餘程悪くいつても、冬子嬢だけは少くとも一應、自分を許容しようとしてくれるに違ひない、そんな反対な望みさへ抱いてゐた。そしてそんな問答が彼女の心を脅かして、却つて小野から去らしめたことは、少しも知らなかつたのだつた。

小野はさう決心をきめると、思ひきつて啓子夫人に、かういふ手紙を書くことにした。

「奥様。

この間の御忠告御叱責に就いては、御好意からだとは肝銘してをりましたが、餘り激しいお言葉なので、一時は恨みにも存じました。けれども、全く考へてみますれば、私の卑小な行爲から出たこと故、その行爲があの場合不可抗力な衝動からとはいへ、自分に出でて自分に復かへることだと思ひました。

私の前途に就いては、私の行き方で勉強するよりほかありませんから、或ひは「學者的になれ」とおつしやる奥さんの期待には背くかもしれません。けれども文學者が皆が皆學者でなければならぬ譯もないでせうから、その中には僕の素質と僕の方針とが解つてくださる機会もあるに違ひないと思じてをります。そしていつでも申上げてゐる通り、私は私だけの仕事をして、それで終るよりほかないのですから、強ひて無理な御期待を作つて頂くことは、私としては甚だ苦痛でございます。

それ以外に、お咎めになつた私の野人的な無作法や、またはあの小説で御迷惑をかけた點などは、たゞ寛大なるお心で許してくださいさうやう、お詫びするほかありません。

それから、最後にもつと根本的な問題は、あれから三日間考へてみました。そしてその結果は、凡てを改めて奥さんと冬子さんとの御意志に任せるといふ、決心をするに立至りました。どうぞこの際奥さんに於ても、また御當人の冬子様にも、改めて御熟考くださつて、私の一身をお

三三一

思ひ通りに御決定くださるようお願い申し上げます。そして私を今迄通りに遇してくだされば、幸福これに越したことはございませんが、さうでなくとも運命だと思つて諦めます。少くとも諦めようと努力します。

呉々も御熟考の上、御決定くださるようお願い申し上げます。

久米 正雄  
小野 辰夫

久米 正雄  
小野 辰夫

勝見 馨子様

かうして小野は、思ひきつてそれを投函した。投函して了つてから、彼は鳥渡、何となく取り返しつかぬことをした。と、ふと思ひもしたが、併しまた仕方がないと思ひ直した。

それから小野は、更に不安と焦念に満ちた一二日を過ぎねばならなかつた。

三日目に、彼はたうとう思ひきつて、勝見家を訪問しようと思ひ直した。かうして不安の中に、向うからの返事を待つてゐるより、いつそ思ひ切つて、向うの返事に打突ぶつかつた方が、寧ろ氣が楽になると思つたからだつた。

もう日は暮れてゐた。小野は電車を下りて、いつも通り馴れた榎町を歩いて行くとき、彼の足は何となく戦かへるやうだつた。

玄關の戸をがらりと開けて、いつもの通り訪うたが、冬子嬢は出て來なかつた。彼はいつもなら殆ど案内も待たずに、茶の間の方へ通るのだつたが、何となく今日はそれができなかつた。

「奥さんにどうぞ、僕が來たと申上げてください。」  
彼はその儘書齋の方へ通つた。

夫人はなか／＼出て來なかつた。小野はかうしてゐる間に、ひよつとすると冬子嬢が現はれて、再び自分たちの關係が、元どほりであることを告げ知らせてくれるか、杉浦でも出て來て、何とか安心させてくれはしまいかと、ひそかに心待ちに待つてゐたが、そんな氣振りは少しもなかつた。茶の間の方にも、冬子嬢はゐないらしかつた。

暫くして、向うの襖の出入口の方から、夫人が靜かに現はれた。夫人は何だか妙に顔中を硬ばらせて、いつもより更にむつと黙つて入つて來た。

「お待たせしました。」

夫人は座についてから、靜かな聲でさういつた。それから、ちらと小野の方を見返して、  
「お手紙は確かに拜見しました。」  
と、同じ調子で靜かにいつた。

久米

それで小野は、もう殆ど凡てを了解した。彼は殆ど機械的に、

「はア。——」

と促すやうにいふほかなかつた。

けれども夫人は、すぐには續けていひ出さなかつた。

「杉浦さん、鳥渡。」

却つて彼女は、何と思つたか、かういつて杉浦を呼んだ。

「何です。」

杉浦は茶の間の方から出て来て、鬮の所へ立つた。

「あの、是から小野さんのことで、お話をつけようと思ふんですがねえ。貴方にもゐて貰つた方が

いゝから、此方へお入んなさい。」

夫人はかういつた。杉浦は入つて来て、黙つて夫人の横に坐つた。

夫人は鳥渡小野の方を向き直るやうにして、さしこいひだした。

「では、小野さんの方から、どつちかにきめてくれとおつしやるから、改めてお話をつけますがねえ。私どももそれから、いろ／＼考へてみました。改めて小野さんとは、今迄の話は何もなかつ

久米

たことにして頂かうと思ふんです。だから、どうぞその積りでゐてください。」

小野は鳥渡前久米から幾分してはゐたが、改めてさう宣告されると共に、悲しいといふのも苦しいといふのでもないが、何だか急に胸の中が、ぐつと窺うかがまるやうに感じた。

「さうですか。ではやつぱり駄目だつたんですね。」

彼は下を向いて、呟くやうに聞返した。

松岡

「え、お氣の毒ですが、さう思つて頂きます。——杉浦さんも、どうかさう思つてください。」

小野はまだ何も知らずに、杉浦が何か一言でも取做すやうなことから、慰めてくれるやうなこともいつてくれるかと、ぢつと其方を見やつたけれど、彼はたゞ黙つて點頭うなづいたきりだつた。

暫く一座は沈黙した、と、小野がまた低い呟れたやうな聲で、もう一度訊き返した。

「で、それは、冬子ふゆこさんの御意志なんですか。」

「さうです。冬子と相談の結果、さうきめました。」

夫人は静かな聲でいつた。

「さうですか。——」

小野はもう返す言葉もなかつた。

久米

と、夫人は、やゝあつてかういひだした。

「で、さういふことに話は決まりましたが、是で何も貴方と、すつかり縁を断つといふんぢやありませんから、どうぞそのお積りで、是からも今迄通り、とき／＼家へ遊びに来てください。」

「はア、有難うございます。」

小野は殆ど機械的に、かういつて頭を下げた。

夫人は續けた。

「それから是非はまた、貴方に此方からのお願ひなんですけれど、どうぞ今度の事件は、なるべく貴方も小説になんぞ書かないやうにしてください。お互に、いろ／＼迷惑しますからね。」

「はい。——」

小野にとつてはこの際、そんなことは問題ではなかつた。彼はたゞ喘ぎするやうな胸を堪へて、猶も夫人の言葉を待つた。

「では兎に角、貴方も勉強して、是からは他人に彼此いはれないやうな、立派な人になつてください。今迄のやうぢや迎も駄目ですよ。私のいふことはそれだけです。」

夫人は最後に止めを刺すやうにかういつた。が、小野はそれに對して、もう返す言葉も出なかつた。

た。彼は首を垂れてゐたが、やうやく、

「では、失禮します。どうぞ冬子さんには宜しくおつしやつてください。」

と、いつて立上つた。杉浦は徹頭徹尾黙つてゐたが、小野が立上ると、

「ぢや失敬。」と、初めていつた。

小野は殆ど夢中で、勝見家の玄関を出た。

冬の宵の口の風は、もう音を立てゝ寒く吹いてゐた。彼はその暗い、人通りの少い戸外へ出て、暫くはどつちへといふ當もなく、走るやうに歩いて行つた。……

婦人俱樂部

何れの西

松岡氏

カキ

馬

松岡讓氏ト久米正雄氏トワ一代ノ文豪夏目漱石氏ノ  
門下生デアツガ心命ヲトシテ久米正雄氏ノ遺愛モノ  
斯クシテ破シタ。其レハ杉浦(松岡)ヲ夏目自家ノ家庭教師

世話シターガソモ久米氏ノ涙ノモトニナツタハ勿論ナルモ筆  
壇ノ輕薄極ニ行動ハ眞ニ攻斃手スルヨリモ僕ハ哀シニ田ノ



22367

# 現代戲曲大觀

▼四六版、壹千頁  
總布、天金、特製

▼定價四圓五拾錢  
郵送料金拾八錢

本書は我が劇壇空前の大出版也。即ち、菊池、久米、里見、谷崎、吉井、長田、近藤、楠山、岡本、長與、灰野、山崎、池田、久保田、田中、小山内、武者小路、中村、其他劇作家協會員全部を網羅して、實に三十九家の自信ある一幕物を選集せる眞に現代の戲曲大觀也。

有島武郎・志賀直哉氏共選

——岸田劉生氏裝——

## 現代三十三人集

布表紙天金特製  
定價參圓八拾錢  
郵送料拾八錢

芥川龍之介 長谷川如是閑 木下利玄 室生犀星 千里見 山本有三  
有島武郎 廣津和郎 小泉鐵雄 武者小路實篤 國池公致 柳宗悅  
有島生馬 犬養健 古屋芳雄 長與善郎 志賀直哉 吉田絃二郎  
江馬修 加能作次郎 久米正雄 野上彌生子 志賀直哉 吉田絃二郎  
藤森成吉 菊池寬 三倉田百三 小川未明 谷崎精二 忽ち  
舟木重信 近藤經一 三島草道 佐藤春夫 豐島與志雄 六版

島崎藤村・有島武郎片上伸・長谷川天溪四氏選

## 現代小說選集

布表紙天金特製  
定價參圓八拾錢  
郵送料拾八錢

島崎藤村 有島生馬 加能作次郎 小川未明 室生犀星 白石實三  
谷崎潤一郎 上馬司 小劍廣津和郎 江口浩二 中戸川吉二 佐藤春夫  
里見星湖 相馬泰三 芥川龍之介 宇野浩二 加藤武雄 有島武郎  
中村吉太郎 水上瀧太郎 吉田與志雄 水守龍之助 細田民樹 有島武郎  
藤森成吉 菊池精二 久保田万太郎 葛西善藏 近松秋江  
正宗白鳥 菊池寬 久保田万太郎 葛西善藏 近松秋江



506

158

終